



No. 117

ティー・ブレイク

Tea Break

積み木あそび

五月のこどもの日が近づくと、五月人形や鯉のぼりのセールが始まる。最近の景気回復を受けて、売り上げのほうは順調らしい。

けれども、景気回復の最中でも、今の株価の高騰もやはりこれは「バブル」ということで、その終焉を危ぶむ声も聞かれる。そう、この「バブル」というのは、必ず終焉する。なぜなら、人間というのはやはり、膨張した過大評価の中では生きることができず、現実の世界でしか生きられないものだからである。

バブルの後には、現実以上に膨らんだ期待が「現実のレベル」にまで引き戻され、過大評価の部分が大きい反省されることになる。

ところで、五月のこどもの日といえば子供の頃。育ち盛りの頃、小学校の高学年の頃くらいか。体つきが変わっていく仲間を見ては、自分も早く大人になりたいと思ったものである。そうしてその変化が自分にも訪れると、すぐに小さくなってしまふ服を見て、なぜか嬉しかった。親にしてみれば、直ぐに買い替えねばならないので、大変であったろう。

でも、「このあいだ買ったばかりなのに、もう小さくなっちゃったの?!」という母親は、迷惑そうな言い方をしながらも、どこか嬉しそうに見えた。そうした気持ちは子供ながらにも分かり、それが自分自身の気持ちと共鳴した。

しかしながら、成長期も永遠ではない。その終わりに近づくとつれ、成長率も鈍化する。

だが、成長期が終わってしまうことを告げて親がっかりさせたくなくて、また、自分自身もそれが終わってしまうのを認めたくなくて、身長も、靴のサイズも、ちょっと大きめに申告したことがあった。“成長期”というものに対する過剰な期待と過大評価が、そうさせるのである。

こうして子供というのは、他人のために過大申告をすることを覚えていき、それが身につくようになって、大人になっていく。その意味では、体の成長の後に心の成長が来る。そうして大人になると、今度は自分の子供のために、自分が持っている愛情をもって、金銭面での過大供与をすることになる。

今、棚に並んでいる五月人形も、通常的生活水準からすれば、ちょっと上のレベルのように思われるが、それでも親は、子供のためにそれを買っていく。そうした“過大申告”や“過大供与”も栄養にして、子供は成長していく。そしてその子供も、いつしかそうした過大申告ができるようになる。

けれども、親子喧嘩の最も多い原因のひとつは、こうした“一種の嘘”に起因した意地の張り合いなのではないだろうか。私自身も、親に対しては素直になれず、できそうもないことをできると言ったり、ときには大言壮語的なことを言ったりした。それは、親の側でも同じであったはずであり、それはあたかも、どちらのほうが高く積めるか、ということを競い合っている“積み木あそび”の如くである。

そうして、その積み木あそびが終わり、本当に相手に対して素直になれるのは、親が死んだ後である。現に、こうして仏前で手を合わせて、偽りのない現状報告をしている。

鯉のぼりを履いて「人魚」と言った私を見て大笑いしていた母の居たあの日。よくよく思い起こしてみれば、床の間にあった五月人形は、その当時としては分不相応なものであったように思う。

東京では、鯉のぼりをあげるところなどないが、せめて五月人形だけは他よりも良さそうなものを買ってみる。こんなことをしたところで、何が許されるということでもないであろうが。

(正)